
ただ 好きなだけ

B E N I K O

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ただ 好きなだけ

【ZINEード】

Z0491D

【作者名】

BENHKO

【あらすじ】

憧れだった仕事につけたユイコ。厳しい仕事だが、めげずに働くユイコに優しく接するユウキ。ユイコは、彼への想いに気付くが…

理由なんて分からぬ。本当の愛が何かも分からぬ。ただ 好きなだけだ

はじめてみた時、おおきな人だな、と思つた。

ただそれだけ。

私の名前は、林田ユイコ。

あれは昔から憧れだつた、ヘアメイクの仕事に ついたばかりの頃。
馴れない事ばかりでよく先輩には怒られたけど、私なりに 一生
懸命やつてるつもりだつた。

あの人と初めて会つたのは、まだこの仕事の右も左も分かつていなかつた、そんな頃。

地方のテレビ局では、ヘアメイクなんて一の次二の次……。 番組
自体に制作費用が少ない場合、
まずヘアメイクやスタイルリストから外されていく。

ヘアメイクやスタイルリストの必要がないタレントを選んで、番組構
成したりする様だ。

そんなんか、その口ケ番組、しかもレギュラーで、ヘアメイクがつ
けるのは、とてもありがたい事だつた。

撮影は、いつも「かのバーを昼間借りて、そこで収録するといつ

た感じのスタイルだつた。

番組進行は三人。

オトボケなキャラクターの30歳半ばの芸人、コンタ。少しワルっぽいイメージのある、20代後半位のタレント、中條ユウキ。

紅一点、主に進行する人物、名高マミは22歳。

その三人に、若手タレントや芸人が、独自でネタを調査し、報告するといった内容であった。

収録は三本撮り。時には四本撮りで、バーが開店するギリギリまで収録している、といった事も多かつた。

ヘアメイクが必要なのは主に、名高マミ。

男性はあまりメイクに時間がかかるないし、スタイルチェンジもない。

しかし女性の場合、収録ごとに衣装を替え、その衣装に合わせてヘアメイクもチェンジするといった事が必要になつてくる。

特に地方に多い事だが、タイムスケジュールにメイク時間をもうけてくれていらない場合がある。

これはヘアメイクのいる仕事に、ディレクターが慣れていないせいと、そんな場合、まずメイク時間の確認、確保からしなければならない。

この現場では、いつもディレクターは、メイク時間をほぼ取つてくれなかつた。

何度もメイク時間の事を相談したが、あまり聞き入れてはもらえな

かつた。

無理にスケジュールを組んいる様で、聞き入れたくても出来ない、といったところだろうが…。

その為、私はいつも本番に遅れない様、慌ただしく動き回る他なかった。

本番中なら暇だらう、と思うかもしないが、もちろんそんな事はない。モニターではどのように映っているか、髪形の乱れはいか、メイクのぐずれはないか、キチンとチェックしなければならない。

カメラが止まっている間に、気付いたところがあれば、それをなしに行く。本番が終れば、直ちにヘアメイクエンジ。

昼食をとる暇など、いつもなかつた。

それでも私は、憧れだつた仕事に携わっている事が、嬉しくて仕方がなかつた。

コンタと書う芸人には、以前に面識があつた。

この番組の収録に初めてついた時、「君がついてくれる事になつたの? よろしくね。」と言つてくれた。

「はい、こちらこそ、よろしくお願ひします!」

私は緊張しながらも、明るく答えた。

本来は歌手だしそうだが、出す曲はあまりヒットはせず、地道にタレントをこなしている名高マミーとはこの番組で初対面。

私が自己紹介をすると、「お世話になります。よろしくお願ひしま

す。」と、丁寧な返事をしてくれた。

年が近いのもあって、彼女とはすぐに打ち解けた。

中條ユウキ。彼にも以前、一度だけ会った事があった。先輩から、「ユウキさんはいつも、『アだけさせて頂くけど、メイクはされないから。でも、本番前にお粉で押さえさせてはくれるから。』

という情報を得て、本番前にユウキに近寄り、「失礼します。お顔押さえさせて頂いてよろしいですか?」と聞いた。

「帽子かぶってるし、今日はいいです。」

と、その日はあっさり断られた。

おおきな人だな。
と思った。

180cmはあるのかな…。

ボンヤリと、そんな事を考えた。

ただ それだけだった。

でも、なぜかハッキリと覚えていた。

ユウキの事は、ヘアメイクになる前からテレビを見て知っていた。もちろん、ファンではないし、特別なにか思い入れのあるタレントでもなかつた。

収録が重なることに、なぜだか不思議な感情が芽生えてきたのを覚えていた。

少しワルっぽいイメージのコウキは、とにかく優しかった。物腰も柔らかかった。

どんなに無理難題な収録状況でも、愚痴一つこぼさなかつた私を気に入ってくれたのか、私を見る目が暖かかつた…と、私は感じた。バーでの収録な為、マイク中は照明が暗く、スタッフに照明の要求をしたが、断られそうで困っている時には、助けてくれたりした。大変な現場だったが、月に一度程のこの番組収録が、私はすごく楽しみになっていた。

その日は、年内最後の収録という事で、本番終了後に、そのバーを借りきって、忘年会をする事になっていた。

収録も終わり、マイク道具の片付けも終え、私も忘年会に参加した。小さなダンスホールに、適当に椅子やテーブルを並べ、各自好きな席へつく。

私はマミさんの隣に腰をおろした。

マミさんと少し話をしながら、私もビールを飲んだ。

すでに、少しできあがっているコンタさんが、私の前に座り、いつもの感じでオチャラケた。

スタッフの方も、時々やって来ては、

「飲んで飲んで！今日は無礼講だから！」なんて言いながら、その場を盛り上げていた。

私はコウキさんを探していた。

もちろん、席を立つでもなく、キョロキョロ見回す事もなく…
ただいつも、今どこにいるのかを把握していた。

…彼が私たちのそばにせりって來た。

胸がドキン…となつた。

もちろん私は、平然とした態度でいた。

「飲んでる？」

優しく、彼が聞いた。

「はい、飲んでます！」

私はできるだけ、明るく答えた。

ドキドキしていた。

「何か困つてゐる事はない？何かあつたら、いつでも俺に言つてきて。
俺が守つてあげるから。」

イキナリの言葉に、私はすぐ驚いた。
ドキドキはピークになつた。

そばにいたコンタさんが、

「ちゅうと、何そんな事言つてんだよ。お前だけカツ ハツけてあ
?...」と、少し悔しそうに言った。

「本当にちゅう思つから。彼女はいつも、俺たちタレントの事を一番
に考えてくれてる。それは見てたら、分かるんだ。そんな子は、俺
たちタレントが守つてやらなくちゃいけないって、そう思つんだ。
真剣な眼差しで、彼は答えた。

何も言えなかつた。

去つていく彼の後ろ姿を見る事もできなかつた。

ただ、ただ、嬉しかつた。

「僕も守つてあげるよ~」おどけながら言つコンタさんとの言葉は、
もはや耳には入らなかつた。

「私はユウキさんのが好きなんだ…。」

そう氣付いたのは、その事があつてからかも知れない。

それからは、彼の事が頭いっぱいになつた。
考えるだけで、胸がときめいた。

まるで、初めての恋をした少女の様な自分自身に、びっくりもした。

「『』が好き?

何が良い?

そんな事、分からない。

ただ 好きなだけ。

それしかなかつた。

理由なんてなかつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0491d/>

ただ 好きなだけ

2010年12月16日02時34分発行